

教師と生徒の人間関係づくり

学級づくり・学級経営の基盤は、教師と生徒との「信頼関係」、さらに生徒同志の「信頼関係」です。特に大きな影響を与えているのは教師と生徒の関係です。教師と生徒との関係の良否が、学級生活に対する安定感や満足感につながります。ここでは教師が生徒との間に信頼関係を保つために留意したいことを考えていきましょう。

1 子ども一人一人に「居場所」を保證できる教師でありたい

生徒は所属する学級に「自分の居場所」を見いだそうとします。教師はその居場所の確保を保證していくことが大切です。「居場所」といってもたくさんの要素が考えられます。

(居場所を考える参考例)

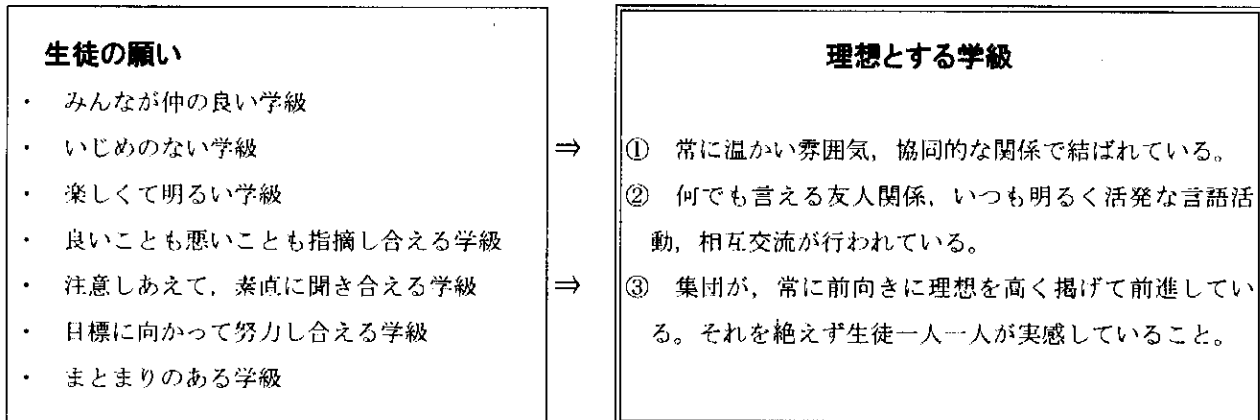
空間的な居場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習や生活するための机や椅子が所属学級に確保されている。 ・ ロッカーに名札が貼られ、下足箱にも名前が明示されている。 ・ 4月の学級開きの前には、一人一人の名札を作り、机やロッカーに貼るなどの準備をする。落書きはないか、変な音はしないか、変形していないかなど交換、修理できるものはちゃんとしておく。 ・ 子どもがさわやかな気持ちで生活できるようにする。不備が出たときも、面倒がらずに生徒と一緒に問題を解決していく配慮を忘れない。
集団の中での居場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日に見えにくく、学級生活の中で教師と生徒、生徒と生徒の相互の行為から判断される。 ・ 例えば、生徒自身が学級の役割を担っていると意識しているか、特定の生徒が学級から押し出されるような雰囲気がないか、また学級集団の動きが特定の生徒の考えや指示に従っていないかという観点からも判断できる。 ・ 学級の状態を把握するには、学級の生徒の動きに気を配ることが大切。できる限り教室で過ごし、生徒理解に努めることも必要になる。いつもと違う動き方、態度などに敏感になりたい。
心理的な面からみた居場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級の中で、自分の思いが遠慮なく発言できたり、自分の考えで素直に行動できたりする。 ・ 人の目を気にしては、安心して生活できない。自分自身を安心して出せる、そして認めてもらえる。そのためには、失敗しても責めない態度や思いやりの心などを教師自身が示していく。 ・ 学級への所属意識が高まりは、一朝一夕にできるものではない。一人一人が、学級の中で相互に生かされていく、心の通い合う学級づくりがポイントになる。

2 子どもの願いを受け止める教師でありたい

(1) 学級への願い

子どもたちは学級や教師にどんな姿を望んでいるのでしょうか。学級開きの時、子どもたちは新しい学級に対して様々な期待を抱いているはずです。「どんな学級にしていきたいか?」という聞き方で生徒たちの望んでいる学級像をつかむことはよくあります。

(学級の願いづくりの例)



子どもの言葉で表現すれば、上記のようになります。理想とする学級像として集約すれば、右のようになります。教師は、学級の状態が理想とする状態になっているのを振り返ります。隔たりがある場合は、学級に問題提起を行い、原因や改善していくための方法などについて、子どもと一緒に考えていきましょう。

(2) 教師への願い

教師への願いについて、小学校の低学年から順に考えてみましょう。

小学校低学年は、教師から認められることを喜びと感じ、学級にいることへの不安感が取り除かれます。高学年になると、認められたいという欲求は一層高まり、教師や友達との人間関係そのものに、より大きな期待感を持つようになります。中学校になると、教師の人間性そのものに期待するようになります。一人の人間、一人の大人としての見方をするために、より批判的な見方も出てきます。

子どもからの願いをきちんと受け止めようとする教師の努力そのものが、そのまま学級全体の「望ましい人間関係」づくりに大きな力を発揮していきます。

小学校	<ul style="list-style-type: none">・ 先生に声をかけられたい。・ 先生に「いい子だね」と言ってもらいたい。・ 先生に「よく頑張ったね」とほめてもらいたい。・ 先生に「よくやった」と頭をなでてもらいたい。・ 先生に気に入っているニックネームで呼んでもらいたい。
中学校	<ul style="list-style-type: none">・ 私のいいところを見つけてほしい。・ 私と友達との違いをはっきりさせてほしい。・ 先生は、同じことを人によって誉めたり、無視したりしないでほしい。・ 私の言ったことを取り上げてほしい。・ 先生はいつでも公平であってほしい。・ 直したいところ、直した方がよいところを気持ち良く言ってほしい。・ 短所よりも長所、自分の弱点よりも自分の取り柄を重く見てほしい。

3 リーダーシップがとれる教師でありたい

学級目標は、子どもの願いを象徴したものです。こんな学級にしたいという願いの裏側には、こんな学級にはしたくないという願いも込められています。学級目標達成の過程には、その学級独自の「モラル」が生まれます。

学級のモラルづくりに、教師の日々の指導は大きな影響を与えています。子どもたちは、教師の指導を通して、「何を良しとし、何を駄目とするか」を知り、考えや行動の基準にするからです。言い換えれば、子どもは、教師の指導により価値判断や行動の基準を共有し、知らず知らずのうちに自分で内面化し、習慣化していくのです。

子どもたちは、リーダーとしての教師を望んでいます。リーダーの学級への働き掛けに立ち止まり、考え、学級が進むべき方向を決定していきます。教師の“語り”“話”は、特に大きな影響力をもっています。その教師のもつ「人間性」を生かして、学級が目指す望ましい規範の確立に向かっていきましょう。ここで教師の話の留意点を挙げてみましょう。

① 明るく、さわやかに、簡潔に

教師の明るい笑顔やさわやかな一言は生徒を楽しくさせ元気づけます。

教師の思いやりのある一言は生徒を安心させます。

しかし、あくまでも 手短かに。

② ほめたり、叱ったりは常に全員を視野にいれて

個人を誉めたり叱ったりするときも、より大きな効果をねらいみんなの前で行うことが必要です。

その時には誉められない子どもがいることや、子どもは叱られる子には極めて同情的であることを忘れないようにしましょう。

③ 時には“とっておきの話”“心温まる感話”を

教師は日々の生活や、自分の体験の中で「ぜひ子どもたちに話してやりたいこと」があるはずです。忘れずにメモをしておき、タイムリーに話しましょう。



4 言語活動に配慮できる教師でありたい

次に紹介するのはある中学3年生の作文です。

ある朝、健康調べのカードを保健室に届けに行くとき、職員室の前を通りかかりました。私の前を二人の担任の先生が歩いていました。その時、先生たちの話が耳に入ってきました。

「今日ね、〇組の〇〇（呼び捨て）、欠席なんやよ。」

「じゃあ、今日は静かでいいね。」

先生たちは私達のことをどう思っているのでしょうか。欠席している生徒を心配すらしていないのです。こんな状態では生徒と先生の信頼関係が薄れていくだけではないのでしょうか。

本当に私達のことを考えてくれるのならば、こんな会話や言葉は出てこないと思います。たとえその生徒に好意を持っていなくてもこの言葉は許せません。

この子どもは、教師の会話を聞いて、大変ショックを受けたに違いありません。それまで教師に抱いていた信頼感も崩れていったのでしょうか。教師の会話の中の“その生徒がいなかったら静かになる”という発想は、生徒の存在を否定することにつながることを考えるべきです。こういった配慮のない言葉については、お互いに敏感になるべきです。廊下という場所も考えるべきです。子どもは、いつでも、どんな場所でも教師の言葉聞き、何かを感じ取っているのです。

教師と生徒一人一人の人間関係をより望ましいものとするためには、とりわけ、日常の教師の言葉づかい、言葉を発する態度、言語活動全体を特に大切にしていかなければなりません。

言葉は、教師の品性や人間性、人間としての生き方を最もよく表し、子どもとの人間関係にも大きな影響を与えていくものです。下記に示すのは、教師と子どもとの人間関係を冷たくしていくものと温かしていくものものです。こういうことを考慮しながら、言葉かけをしていきましょう。

人間関係を冷たくしていくもの

- ◆ 無意識に子どもを差別する
(比較する、極端に分けてみる、特別視する)
- ◆ 知らずに嫌悪し、蔑視する
(見下す、見下げる、無視する)
- ◆ わざと茶化し、皮肉を言う
(甘くみる、軽くみる、笑いの種にする)
- ◆ 時には脅し、怯えさせる
(どなる、ののしる、ばかにする)
- ◆ 忙しさをたてに、いい加減に対応する
(愛想つかし、鼻で笑う、目線を避ける、無表情、取り合わない)
- ◆ 絶えず、命令・指示ばかりする
(やれ! ふざけるな! のろのろするな! 言うことを聞け!)

人間関係を温かくしていくもの

- ◇ 「どうということかな?」
子どもの心を自然に開く
- ◇ 「そうだ、そのとおりだね」
うなずいて確かめていく
- ◇ 「できそうだ、大丈夫だ」
力強く子どもの心を引き出していく
- ◇ 「誰だって、そういう間違いはある」
子どもの心に共感し、共有する
- ◇ 「よくやったなあ、できるじゃないか」
心から子どもの自立を喜ぶ

5 出会いを大切にできる教師でありたい

新学期は「出会い」の時期です。新しい環境で、これから1年間の礎となる人間関係を醸成していかなければなりません。勿論「よい出会い」を、子ども全員が期待しています。

しかし、近年、「人間関係づくりの弱さ」が、子どもの課題の一つになっています。級友であれ、担任であれ、良好な人間関係をスタートできない子どもが多くなっているのです。

子どもの担任に対する関心や期待は大きなものがあります。担任自身が心を開き、こんな人間なんだとさらけだしていくことで、子どもに人間としての魅力を感じさせたいものです。

X先生を知るイエス・ノークイズ

中学生活の窓口となる担任をよく知り、不安を軽減するとともに、担任自らが自分自身を生徒に開示することをねらっています。

【準備】 「イエス・ノークイズ」のシート

【内容】 ・4人組をつくり、机を寄せて座る。

- ・シートを配る。
- ・クイズを一問ずつ担任が読み上げ、生徒はイエスかノーか4人で相談してグループの答えを決める。
- ・全問終わったところで、一問ずつ正解を言いながら、担任自身を面白おかしく自己紹介していく。
- ・グループごとの正解数を挙手で確認し、一番多かったグループに拍手をおくる。
- ・4人組で追加の質問を話し合わせ、質問していく。

質問例 「X先生は国語の先生である。」 「X先生は東京出身である。」
「X先生には6人の子供がある。」 「X先生の趣味は釣りである。」

「ジャンケンでホイ」

新しいメンバーによるスタートです。改めてゲーム感覚での自己紹介によって、〇年〇組の一員であることを自覚させ、親しみのある雰囲気をつくりたいものです。

- ① 学級の人数分に近い枠を作ったカードを作る。
- ② そのカードと筆記具を用意して、級友とジャンケンをする。
- ③ 次々に相手を変え、今まで話したことのない相手や名前を知らなかった相手をジャンケンをしていく。
- ④ 負けた者は相手の持っているカードに、自分の名前や必要なことを記入する。
- ⑤ 終わった者から席に着き、書いてもらったカードを見直して自分との共通点をさがしてみる。
全員が終わったところで改めて1番から順に名前だけを言っていく。

〔参考文献〕 「学校生活不適應の発見・予防と援助・指導」 牧 昌見・高階玲治編
「中学校学級担任必携」 荻野一郎 齋藤 實 共編
「どの子にも居場所がある学級づくり」 高旗正人 編

今まで教師と子どもの信頼関係を築くための配慮事項について述べてきました。実際の子どもの対応を、2つの例をもとにして考えてみましょう。

Q1 学級の雰囲気は自分に合わないと言って学級に位置付かない生徒がいます。友人関係などを考慮した学級編成をしたつもりなのですが、どのようにしたらいいのでしょうか？

新しい学級に溶け込むまでに、時間のかかる生徒がいるのは当然のことです。教師の目から見た友人関係も、表面的な付き合いだったのかもしれませんが。生徒自身が、本当に心を許した関係であったか否かを見極めるのは難しいものです。

ただ、この生徒は何らかの形で担任に自分の気持ちを訴えています。それは担任に対する信頼の証です。悶々とした気持ちを担任にだけぶつけてきているのです。まずは、そのことを評価し、「本心を打ち明けてくれて、嬉しかったよ。どうしていったらいいかを一緒に考えてみようよ。」とメッセージを伝えましょう。

本人は、今の状態では教室の中で話す相手もなく、つまらなくしていることも考えられますね。休み時間や給食配膳時間、放課後などに生徒の様子を見て教師の方から声をかけていきましょう。話題は何でもいいのです。本人の興味のあること、テレビの番組、漫画、ゲームなどたわいのない話の方がいいでしょう。「この先生は話しやすいな」という印象を与えることが大切です。毎日のコミュニケーションを積み重ねることによって、教室への違和感や不安も取り除かれることでしょう。またその話の中に、同じような趣味や興味のある生徒を紹介して、話の輪を広げていくことも可能です。

Q2 小学校の時に不登校経験のある生徒が、2学期になって欠席が目立つようになってきました。学級で問題があったようにも思えません。どのように対処したらよいのでしょうか？

小学校で不登校経験がありながらも、中学校に入ってよく頑張って登校していたのですね。まずはそのことを評価していきましょう。

2学期は夏休み明けということもあり、生活のリズムがつかめずに登校を渋る生徒が増えてくるのは確かです。欠席の理由が体調不良ということであれば、その日の夕方に自宅に電話をします。保護者に体の具合を聞いてみましょう。その時、本人が電話に出られるようであれば、次の日の予定を伝えます。でもその時に“登校する”と約束はしない方がいいでしょう。「待っているから、早く良くなってね」という言葉の方が本人のプレッシャーにはならないですね。

欠席が2、3日と続くようであれば、家庭訪問をしましょう。でも、その時もなぜ休んでいるんだと問い詰めるようなことは避けて、「君の顔を見にきたんだ。元気そうにできて安心したよ」と本人の不安を取り除くような言葉が大切ですね。あまり、学級の様子を伝えるのも考えものです。今度登校できたときに、「自分だけ知らない」「自分だけ遅れている」と不安をかきたてるからです。生徒自身が学級の様子を尋ねてきたら伝えるようにしましょう。

本人とつながりのある生徒が配布物を持っていくついでに手紙を書いて届けてくれたり、一緒に時間を過ごすことによって登校してみようかという気持ちを喚起することにつながることも考えられます。ただし、届けるかどうかは生徒本人の意志を確認し、強制的になったり、義務的にならないよう配慮することを忘れてはいけません。